





林氏雜纂卷之下

松浦武四郎 編

禁錮中北雜詠

有りけり廢れぬ事無ひては秋の空より都  
うきあらめくにとまよつては森せむる宵の空を  
ゑくもむかとほかる書とす角せうてそら羅よかす  
武士の姿をか氣川るれの本れうとれ本うすま  
仰そはえとねと併てあらんとどもかはくよ  
我うえ犯せふ達うぬれ源は源うるれの本へ白川乃  
天のト比士あるとあら川乃あらとよみふたようを

紫萩書解  
よしひの  
ますと望

木上集卷之二

うちなるまよた逢えま比川うひ海まねうりお波波う  
はづれやまみのあも難ううす今日赤のゆひくし  
思ひもや若れぬよたれい生えよまよまくおもくふ  
身は沈き風いはまくのとてひる寝くわくうちもよせ  
身がめよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ  
ゆくあがいのつけりに書をもつとある事多のあ  
せくらむ住れ至りぬめうて終り芝生比原よおき

和一

白英 小川勝盛

紫萩庵ふちよや折參ましまれまひつまくと先

和一

小車比原はつとまく川比瀬はまくうりあさうねまく  
又和一  
白英

あく河はまくふろたかはとくもくみくはくの限はばつまく  
病比床に差へまくまくはくそくと心情起り  
あくのよもとまくとくよれほくあくの病比床に差へまく  
寛政五年比某旦

去年つま一 首に難夷や明乃者

我の首うゑの難夷う御代のとく

ももとまくつまくれの本末は假うじゆ出一も苦せぬよ  
がくの内も口呼ともと假の多徳のほく人りまくねくとく  
ほくとく一をゆまくまくかまく

木上集卷之二

新玉のとよみり新ふもく書せまき消やくぬをかずひや  
季月と高の高ようめれとりの高もくといたれま  
は生も聞ふ望むむそとよも陸よがくふの命ゆくよ

和子

白羊

闇に立つて陸小おもむまれまへりふるあらわれ

鏡絆小書つあらすと

六景

るくくく家北慶なまくくみもひひふれても影は  
口わやく半死半活くよしの姫病北床くむくく  
少景

初夕歌清く御くわがつうを門に立て猿乃石にどうれ尾

あまやくやつまうとく新正北幸と進歩の今閑事と  
六景

と古物見せらうと

多代者と書ふまきと海北園のちうれまくまの宿と  
きとく称ゆめ人のまくとくとく御名記葉がくくれお  
はり歌やまくのとくとくとくとくとくとくとくとくと  
花うにとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
分れ絆とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
けつとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
けつとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

よのや代物をどうぞむすびにあひつゝと云ふれひの山  
立木と山も累々庵ふトドケル日そね此志を表觀する  
如きこそ業のたゞ根器アツメはたゞぬ煙ノ猶うじゆ  
住人代えろくかやは庵ハ雨のちとむアコハヨモ  
チトテ既す庵は雨やとて一見候うりとぞ  
可見ねはほせうハ事にわれおの義は前引はれ  
うこ義、故あれよおもふ業の庵はあすなとく大  
夢代よて差乃業と大地アソムル人代えうれけで  
風也と意候ヒリおなまきと瑞よりよ庵なるれハ  
家研紙トアシカ我まにて稿をまの業またとく火

よのやうち人とおもひ業を業の鬼アリ翁つゝ松を  
ある人まうじ海がまうきのうちがまうに朱つけた  
事くまうる業外いきうて、業あらまつて業の志  
翁、翁よもよる業を接すみの人とくうれ波を

和一て

白羊

うき波じゅう業が進まくゆるはるいをうじむ  
まうりて事わざりの聲の人のことくぶ

あむに

月と日比ねれをまはちらくふくせは越角を背

闇ア次むすとあそ

知明若狭武部

五

おもひふを能まと見てゆきめにせよ身とほくで  
可れどもまよは廬山はすのうへまよおるま  
す廬山みやうと志はれ動多義其根まつり根  
おやじいつの事はとまくらじまひく壁は壁  
せたあるむむとくに仙人地もあらわすも  
み代のこじらはれ林とまくらむあらわすも  
志はれ林宇野て住居はすまよは壁は壁  
葉あむはまうれあすもまにむつての竹林すも

朝霞空ふ袖ととひ来る波がうなぎはたのあとをみれ  
まよひてよむ移り置けよけねばねうにまがえとく  
若きとくはとくのむかはせまよは雪乃あは紫の下  
ききあはるさうひの似ぬ梅のえとく／＼おひよもん  
きのねのつぐわむてあくろくまくはきくむじがまく  
梅のまことゆきあはりゆきよにあもし廬山は日陰とくとも  
陸奥北野のまよはれまよはれまよはれまよはれま  
人乃よおまくはまよはれまよはれまよはれまよは  
れまよはれまよはれまよはれまよはれまよはれまよはれ

林氏家集卷之三

春の代がる事の多き事はとあまき事にあらず  
よし絶えずと仕事もまたさうともほのゆれどくへり  
紫ふうと紅葉れどもよ梅つやと雪をなする事  
あつて何よりものとみたる事はまことに  
有れやア高ひ紙書へば落おき紙をもとよめられ  
りよろじくとくらにせんとくらはしちうはりよ  
けくあれ、里方に四七の事はあつて、もと  
峰たの義をもとめれば木ハ松のや一木にこられしむ

和

白羣

芳村、故つまよす山よ立寒あたらむが里のふも、さりとて

又五

卷之三

又和

白羊

おもへた分明の事とほれまことにあらう  
まあれ、庶民の事とあらう事を行はん、人を尊

和一寺

白羊

林文選集卷之二

萬葉集卷之二  
名也者也あれをあれや相あむは絶ひのよゆゑとても  
主徳をもたずく者もよま達てふゝきをもとめりあふ  
越乃の名をも神も南をもひわくより故すい。○  
共六角山の義比弓射もひひをもむるにち  
荒す、哉、もじ風也、ひ、雨、ハ、あ、づ、く、也、雲、そ、も、竹、  
十乘つ、ひ、の、也、有、さ、り、か、  
ぬ、も、こ、ち、比、多、い、着、一、も、つ、多、ま、へ、ほ、う、の、常、の、人、の、多、の、人、  
よ、多、よ、の、も、の、而、影、差、く、も、不、ア、ス、ト、モ、は、是、其、多、也、  
新玉に、多、よ、の、人、の、少、す、と、黒、一、ハ、ち、う、れ、あ、せ、う、行、す

卷之三

林子平贈小川七俊

一たまにあはせば、其處に在れ

一家をもへる事無く及むる仙臺は人一人のやう生れ立つて  
生れ立つて是も若くあめりあは下に捨列の如きあれやア其の  
然家業を娘嫁へし必は外、其下の所へ云々捨業奉上謹勅  
小室未んかいやこひはは一人格にて其處を少く取て置  
あははその所の一室をとひて是をとひて死をとひて是  
之トヒキテアリ、此が形、而て也トヒ

一小子、不幸早夭。二月廿六日以火葬之。佛至三月元宵日、  
逢雨。以大悲心、降旨召天帝君、令齋戒一夕。尔其夜、有十人  
命數者來。謂之取計。皆曰否。

善行 而此所作無與于子平之文章者多矣  
幸已矣而時亦一而生也

一通之數語多不外乎子平之精神  
之氣節也其文章之才氣之雄才之英  
氣之妙不可謂之子平之文章也固已  
知之而不知其所以然者也

閏二月十五日

林子平

小川只七稿

同藩小川國手宗藏林子平贈其從祖只七俗牘  
一通觀其下筆落落有風致而其事則在死生之  
際矣蓋子平之刻海國兵談言涉忌諱官召而詰

問之遂燒滅其鏤板其禁錮命下實在寃政四年  
五月十六日矣此牘乃作於其閏二月十五日者  
而詞氣慷慨從容閑暇絕不見擗抽衰颯之意不  
可以概其平生所涵養矣余嘗欽子平之為人及  
觀此牘追慕之情益不能已因請國手得其中一  
斷片欣喜之餘遂臨寫其前後之文以為完璧裝  
潢而傳於家云 磐溪大觀崇識

林子平稿五種注而書陵

九月廿二日予多有事未暇及忙故未敢先付  
病中手書之

一嘉慶丙子國通後事有記入後事序下云初先  
以中興事為口號於外多無事之言及至實錄言  
事去半中興事一教牠之於八達上所稱者也存  
之通商財貨緣極之仁本之才抑庶牠之本之  
予此一部如本之多故名之為本之於本之  
哉一多不無必多事之而乃了了然之以字之多不  
一石揭之而作下文以事之年又之於本之於本之  
大也之也之追之也之也之也之也之也之也之也  
多之又之之之也之也之也之也之也之也之也之也  
之也之也之也之也之也之也之也之也之也之也

十月五日

林子平

五代友仲校

我鄉巨理往齋嘗受兵法于林子平、往復書柬、藏  
在厥家、是其一也。子平當時、言洋警可備、實為破  
天荒語、後來籌海諸議、率皆不能出其範圍、宜乎  
其死五十年、海內尸祝尊奉、日甚一日也。往齋六  
一偉士、嘗製天輿圖、始以

皇國為緯度所起、謂必如此、然後可以為此間講  
地學法、併有防海諸策、余將出都、舉此幅見贈、今  
則其人既亡、東國典型盡矣、遂錄以存懷舊之感、

仙臺齋藤馨識

寛政四年五月十六日林子平著述海國兵法及以  
三國通曉之幸之依於獨樂山號曰吾妻古道

松年陸家子。家子林素膳同在中

其事以經利欲、一己之私、皆爲之  
之風也。又挾私念、與之多日也。而  
奇性、素說本來、至多、善惡、不論。  
故也、總入、多好地理、或善了、陰陽、  
言、則二丁同柱、八店、而、多、善、多、  
多儀仗、多、善、多、好、膳、門、後、也、不、傳、不、

右急板行和并板木瓦瓦

右板多越中多及板多之町生多行小向即生作

作渡之

天保十二年辛丑七月方知大山萬政之命佐渡守戶

游人

石矢子年五智

林良伍

右林子平俗先生本塾在中晉文政五年之季二月生轉  
任山東任之所故之以號之傳不以姓字而紀時一以其  
方、口渡名者之至者也。今取水望雖然不以指  
圖為遠圖。但之日主人立之故知中渡津又取之不移

右山澤別院諸事委左原主

五月

林子平越智友直に日本を駆りて馬を送る事ありて唐大和  
乃ぬと我故の人にすりて他の家とほことせざりて  
六十餘りの年を経て今もまた一處に於て肥の郡  
を駆け巡りて唐土人よしりと語りひきりゆきあれど此  
海とこそくわが身よろじて夷地を振るう姿うしては  
日々の海をせめ改倣よつとあり一派なる時代ふまへて  
遙これぬが日ひもくつて海王兵法三國通曉と書取  
一あやねく大つてにきておれども其書柳葉北山草  
いきに遼東あるて竟政四年五月爲独擅白川竹  
淫む多岐中ち空位朝臣名命故のうに林素が善友諒

侍へて仙府比亭に憩ひとすわよ奥様のゆき秋とて親  
かへ一書引ひるべ一枚本引ひ金を手附ふておひ  
達て日向の事と改めおまほはの日わは新路もと  
坐して小亭にこよりて一向お忙いとてゆきと明る  
此事よりかゆくと通じて金を手附ふておひ白川  
清盛道則藤掾式教知明おと事と慶めぬれお友  
直ととさ處に在り浮かびあたは終は芝生あら菴は松  
を身とされと送則芝の庵よあやおとまし少佐はま  
迎えとせ我までうとさればな直西シマツキ少佐乃通ひハ  
何處と舟川孔闇よはひ一おれとそつまとえられ

知明院とては本多と御と初とておとて方被助とてう  
自と人と云ふれいと友直とてじとておとて方被助と  
自と人と云ふは本多と御はとてうと後て口小きとてう  
まうめれい友とち極やあよつまくと安ハ以れいの爲れ  
うとひ廻る文代友同とてひて既よ寛政五年水育月末  
此にやうえああて山就雲流は假せ莫高前院ああま  
ちとて院とて奉天保十二年中まおおおおおおおおお  
尉景吾朝臣孔とて友直れ生れ方とて拔多のをせ  
経すととおとおとおとおとおとおとおとおとおとお

よがまうてそほるもよつまに一とをたゞぬよ、がゆ一あけ  
きにゆく水す有 柳量さむかくちを改めらるよ  
まをみひ西の沙原の一傍よせんれりゆ沙よとふを而 故  
左直代役と教させのふもと時ひ故桂宮松竹深水望 繁多  
左邦朝臣 古命故侍へゆりぬの計 番地を收ひん  
たうちに極す活て主事ゆえよ おもろ内を通明是  
祝ひうめりすし大老比嘉よもれぬそ我里はをめりて  
きく御子の事我詩ては乃學アーバトスのこ

丁時天保十二年六月

平陽林通明徳

本居宣長集生沼致書

林子平傳

仙臺有奇士、曰林子平、父源五兵衛名良通、仕幕府、有故削籍、而姊既聘為本藩側室、故子平及兄嘉膳皆受藩俸、然子平倜儻有大志、常見人之酣豢於富貴、飽暖自安者以為是遭變故、則不堪其用也、於是寒素自給、雖藍縷糲食不厭、自視猶在兵陳間、性健步、嘗遊四方、靡遠弗至、行輒躡屐、如往来隣里者、人不知其行千里之遠也、所遇風土之美惡、地勢之利害、政刑民俗之得失、皆諳知之、尤注心於邊防、前是寓藩醫工藤球卿家、球素有邊防之議、子平論

與之合、於是從鎮臺、再游長崎、接異邦人、咨訪海外諸國情狀、益知邊防之為急、適清商在館者、激事忤命、鎮臺命子平及諸士、勦之、子平奮鬪先衆、生虜數人、曰吾知西人之伎倆矣、既東歸、遂著海國兵談若干卷、大意以為西北諸蕃、概以奪地拓疆為務、威力日強、必且朶顧於我、而彼長航、航海、洪波、大濤、視如坦途、我環國皆海近、自日本橋至鄂羅斯阿蘭陀間、一水路無有阻隔、彼欲來即來、而我拱手無備、亦已危矣、必也節國用、修兵備、瀕海要地、設臺置砲數年而沿岸皆壘、儼然成一大長城矣、然後一旦有變、以逸

奇語驚人  
真奇士哉

予嘗感樂翁公閣老之賢而深注意于邊防者、同時有子平其人、宜引以為建國家萬世之策、然不啻措意而還問、還問而不知見、豈已相軌而忌之乎、

待勞庶可無患、而尤可慮者、我南北諸島、委而不顧、彼或據之、是異日之大患也、因著三國通覽以論諸島之形勢、二書既上梓、海內未嘗知外寇之如此也、咸謂諸蕃之來、商船耳、漁船耳、曷有他志、彼張皇無根之事、不過為釣名計、幕議亦以為然、命毀梓、且禁錮于仙臺時、寃政壬子五月十六日也、先是閑院宮贈謚未決、物議騷然、子平見樂翁公、公談及其事、子平笑曰、天朝之於幕府、是一家事、縱令有變、亦猶夫妻衽席之爭耳、不至失家也、若夷虜則是在外之大盜、苟不為慮、必至併家奪之、安可不憂哉、

抑其人鋒  
鏹大露不  
可共議機  
事乎竟之  
不免為盛  
德之累也  
確論可謂  
知所輕重

蓋其以邊防為憂也。如此至是子平作六無歌自号  
六無齋主人。實以寓逍遙自適之意焉。時輒為子弟  
談兵罵世之講兵主一家曰甲曰越者曰彼何適用  
苟欲適用不若讀古戰記錄而察其勝敗之由為有  
得也。又見子弟之讀書者曰。讀書可得然足跡遍天  
下者然後讀書亦足以為用。卿輩足未嘗出里閈。何  
足用哉。歲嘗饑為藩老佐藤伊賀著富國策以為東  
海多鯨。苟能捕之。不足以助國用。其他陳省費濟財  
之術。雖不行識者知其可用焉。又著父兄訓。蓋謂前  
是童蒙有訓。然今之世。父兄亦不可無訓也。隨筆雜

記有數卷。皆居常聞見所得。巨細盡載。亦多裨入者。  
同時高山正之、蒲生秀實、皆以奇士稱。然不與子平  
合。初子平在京師謁中山亞相。亞相盛稱正之慷慨  
論時事。涕隨言下。狀子平曰。彼有泣癖耳。今時舜平  
奚以泣為。而可憂者。唯邊防而彼一泣外計無所出  
公亦以彼為善。不知一旦外寇之變。坐待風浪于萬  
一耶。秀實亦嘗訪子平。行裝甚野。子平一見罵曰。何  
物措大鄙野乃爾。秀實亦忿曰。田舍翁之慢人。亦至  
此耶。不交他語而去。子平既廢閑歲沒。其後十餘年。  
東陲果有鄂虜之變。秀實服其先見。上閣老書曰。祭

神風可待  
外虜何足  
慎是當時  
之通論宜  
乎不免子  
平之慢罵  
也

奇士能識  
奇士

子平之墓而謝其靈可也及幕議修邊防蓋亦有  
取於其言追賜赦姪某始封其墓事在天保壬寅距  
其死凡五十年子平名友直子平其字也

論曰余在鄉常從互理往齋游往齋即受兵於子平  
者也嘗為余言曰子平為人磊落而守己謹嚴尤有  
可稱焉子平自禁錮之後幽居一室人或謂之曰子  
雖禁錮事係幕議非出本藩之意且歲月已久雖  
間出游莫或知者何不出訪隣里友朋而自消遣也  
子平曰日月在天人可欺也天可欺哉因作國歌以  
自述至死未嘗隻步出戶庭噫子平之自守如此豈  
使千里比

### 特一奇士而已哉

#### 附錄

嘉膳之妻患瘦頗劇雖親戚或避之而子平看護毫  
無怖意既沒嘉膳兄弟護尸而卧夜半失子平所在  
呼之不應聞尸衾中鼻息齁齁揭見之則子平也叱  
而起之子平曰夜深寒甚故借衾耳抑嫂已死矣兄  
猶有所妬乎因一笑其不拘也如此

初在江戶從某氏講兵法聞幕府藏外國所製甲  
冑使某氏請出之子平曰徒觀不若躬擐之愈也即  
擐而跨馬一鞭而出馬躍不休過數街入一侯邸邏

隣之人不隻步出戶庭嗚呼天耶入耶咨訪海外諸國情狀欲使人知邊防之為急續子平而起者為渡邊華山高埜長榮想天保戊戌年贈月二子偶會於予師安積艮齊翁見山樓酒洲間盛說歐目今事

予時纔成童以行杯羞赧侍傍粗聞其詬雖在可解之間似少得其要無幾

卒擁止之俟出問其故子平因詳說其所由侯奇之脫袍賜焉且使護送還之俟乃閣老某也

竹堂 齋藤馨稿

人文共足千古庚午仲秋 栗本鯤評

書涉無誓獲罪各不得其死處而清國阿序之事起累如其言殆與子平合符唯無上書閣老訴其冤君實其入已

矣噫

林子平傳

佐木知芳著

林友直稱子平江戶人其先出於越知刑部少輔通高曾祖通春稱總兵衛仕豐臣秀賴豐臣氏亡仕堀秀治<sub>守</sub>食祿三千石迨堀氏國除徙江戶祖通安稱新左衛門父良通稱源五兵衛仕

幕府食祿六百二十石為小納戶兼書物奉行其賜邸有四門配方位

文廟改賜氏曰四門叙從五位下稱大炊頭良通好學博涉古今善和歌最通國朝典故著儀式攷十卷

與新井白石相親善、後因事削籍、良通有二男二女、長曰友諒、稱嘉善、少即子平、長女清承父善和歌為忠山公側室、公子名某、出為列谷城主士井侯之嗣女、公子嫁出雲少將共林氏所生

也。公因召友諒祿之。於是友諒以子平至、始著籍仙臺、子平性寡欲、而機警過人、慷慨有大志、喜奇策、又酷好跋涉、健步無比、行千里猶以鄰、每出輒穿木屐、風餐露宿、惟意所適、遂西究肥薩東窺蝦夷、閱數年而歸、好說海宇之大勢、兼及藩國之謠俗風土、又其所至、必觀山川阨塞戰爭之跡、攷攻守勝敗之所由、著圖說數卷、鑿鑿中窺云、初遊崎陽、不得要領、而

旋後從鎮臺再至、因得屢見蕃漢諸客、審彼邦情事、以謂近時西北海外諸國、猖獗日甚、據義艦、挾巨礮、狡焉覲人之國者有之、而我國四面皆海、不能保其必不來也、安可不豫備焉哉、而其所以備之、則節用蓄力、多造巨礮、沿海之地、列砲臺、置銃手、嚴斥候、使列國各自為守備、至則應、不敢騷擾、而其要尤在審虜情形、勢地方強弱、彼我長短、參而應之、故至於其兵制、則自有出于和漢古今兵家所傳之外者、是尤不容不豫講焉也、遂著海國兵談三國通覽二書、備論之、其言率係奇闢獨創之見、讀者激賞稱快、二書

已敷世子平之聲、大噪列國、然以其書有觸忌諱者、遂得罪

幕朝乃付子平於仙臺禁錮之、於是著父兄訓、作六無歌、自號六無齋主人、兀坐一室、影不出戶、局者數年而歿、子平材武多藝、最善騎、恒諸等輩曰、縱橫馳騁、視山谷如平地、而後始可與突敵陷陣矣、若夫擇毛色、習節奏、徒可以供昇平燕享之觀耳、其自奉敝衣糲飯、時犯寒暑、衝風雨、曰、武人如此而可也、煖衣肉食、媿佚軟脆之人、緩急何足用乎、其在崎陽清船惡少數十人、蹂躡街坊、市人騷然、鎮臺遣子平捕之

彼據高所、拒鬪頗力、子平掉辭而進、立手縛十八人、部下駭服、其勁捷子平咲曰、斬將之手下諸犬彘可惜也、少時詣幕臣天野氏論武及異域、鎧、主人適獲一領出際之、子平乃擐焉、上馬揮稍、作擊刺狀、盤旋生風、馬驚逸至□□侯邸止、道路囂然、便為邏卒所執、侯歸、遍呼出見之、曰、聞名久矣、卿安之、乃與坐款語、賜時服一襲、子平服之怡然而還、自少絕意仕途、工藤殊卿仙台臣雅與子平親善、處江戶、頗以善方顯侯伯權貴之門、靡弗出入、嘗勸子平曰、子戚屬多搢紳、幕僚推輓有入、盍干祿仕、苟欲干、則余亦有攸周

旋矣。子平掉頭不肯，終身不畜妻妾，屢空晏如也。其在江戶番坊、芝口矢火，子平疾走赴之，至則風怒火熾，煙燄已及仙臺邸，乃躍上屋，竭力擣救，輕捷如飛。公望而壯之，使侍臣就問其姓名，不答而去。性又強記，而起居必以墨斗隨，平生見聞，及有所得，輒抽筆記之，遂鬱然滿簏。沒前月餘，力疾把筆，刪削一番，曰：棄之亦可惜。國相佐藤伊賀固奇其才，會凶歎之，餘國用不支，因問濟之之術。子平為述富國策若干篇，皆經濟要務，雖久存心於此者不能及也。其在京師，□□納言公引致之，談及邊防，公顧左右而言他。

先是公召見上毛高山正之彦九郎正之好語

天朝舊事，至於權移武門，簌簌涕下，酷中公意，以故

公稱道弗置，子平乃曰：渠有泣辭耳，方今

王室附托得人，垂拱而治，豈有可泣者哉？抑天下之可慮者，不為不多，而孰若邊防？公亦欲復附之神飈邪？公默然，蒲生君藏君平訪子平於江戶客舍，君藏狀貌寢陋，子平不禮焉。君藏恚而去，終身不復見。後作策，五通上閣，老某侯及邊防事，曰：用林子平言而封其墓，贈以勲位，可以勸天下忠義矣。其首倡之功，不可揜如此。而後之策海防者，亦皆以子平為宗云。當

幕朝康子之

大拜遭

赦距沒寬政癸丑實四十九年矣始得封其墓  
野史氏曰余嘗承乏宗國醫學教官徙處仙臺數  
年與子平姪友通通明數相會文酒間二人為余語  
子平平昔頗詳因略序所聞立之傳如此世之好事  
者善語子平多涉怪奇要皆委巷之談爾

子平生四海帖安之時乃能抱杞憂留心於邊防  
著兵談一書可謂豪傑之士也此傳敘述明備  
使英魂毅魄不朽于千百世之下不唯為子平策

勲亦足以警醒世之狃昇平而不以邊防為念者

艮齋信僧評

林良伍先生像



曉齋源雅方持寫

峰譜卷の  
竹枝の書

少ちも見ひる

無くわからまへよ海の  
ちとさをなと

ゆひあく

良阿

漫遊中町齋画帖中抄之

岡村新左衛門

同源五兵衛

号笠翁

林從吾

嘉善 名友諒仕仙臺侯

醫ヲ業トレ日本橋辺ニ住ス  
お清の方より子平迄亥は原業  
善ののみ處故名子平也者之の  
子供也す。

子平 名友直

女 喜多 江戸板田所火消典方  
多様市郎右衛妻

おまよせおよひゆふ候

一利徳 土井左京亮

寛延二年七月六日生辰名義と即明和え

九月廿六日土井太陽利佐守晴吉より承り承れ  
涉空因九月十五日伊國許より發ち因ニ年十月移る  
初う御目見因ニ年二月廿六日利佐守より承、浦赤坂  
は福因ニ年三月廿六日率薰聲院殿舉観到覺然居士  
一御女子 静雅方子出雲御前

松平出雲守治將公室 雲州松江城主十八万六千石童名  
鶴太郎又佐渡守實曆ニ年正月十六日於江原御坐因三事  
十月十六日縁組解雇十一月十九日承<sup>ノ</sup>通被仰自々安承  
三年十一月十九日乃結納十二月八日乃婚礼因ハ年九月廿六  
は袖苗明和四年閏九月廿五日御舅出羽守隱居主計頭

入道一丈南海守佐渡守因ニ初う御對面<sup>シテ</sup>奉<sup>ス</sup>事  
出羽守様は陰石後不勝仰<sup>ス</sup>幸<sup>ス</sup>去文政ニ年四月辭樂  
院様と<sup>シテ</sup>以下屋敷大崎<sup>リ</sup>住居

友通

稱珎平

通明

稱良伍嘉永ニ年入道号良阿

致直

長沼某

性豪<sup>アリ</sup>ては才季の以ハ威儀雄姿<sup>シテ</sup>初起のまゝ、初歌<sup>シテ</sup>の筆  
葉<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>ひそ處<sup>シテ</sup>の性<sup>アリ</sup>て、余天保十三壬寅のトキ<sup>シテ</sup>  
やかよ歌<sup>シテ</sup>其<sup>ノ</sup>活<sup>シ</sup>をも母<sup>シテ</sup>母<sup>シテ</sup>あは水<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>書生二人  
が書<sup>シテ</sup>される平<sup>シテ</sup>事<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>思<sup>シテ</sup>ま<sup>シ</sup>れ<sup>シ</sup>に自<sup>シテ</sup>歌<sup>シテ</sup>居<sup>シテ</sup>様<sup>シテ</sup>

幸哉語りに一、よき紙行で墓石が間違ふも幸  
謹情せぬまゝおそれへと下り立候。如はるゝも  
北山の院の石碑に奉肉をとむるやうも小  
あえかず。其後四ヶ月と過て七月中秋月に水戸  
乃浦ゆりを傳ひ水戸のひのくにゆきとんと舊  
詠也。

追の龍雲院一石碑立と幸に作幸協  
不と見るに引くと思ふてあつませる程林上野と幸  
寛もて余飯を餘ハ贈事に難くは五事と過てまた弘化  
丙午八月再び詔仰に去秋まく水戸より書生二人娘を  
ひれ子平比事立一よりやゑさんと名よつまく五事す

二品ニ承我姑アリ由ミ時余よ當ま比案旦駕アリモ一葉  
孔経冊故ふまくよ

よかのほもむけ頬されや千里れむよもく然むく  
子余おあそばせよもくろれまわまやよまわられとゆて  
よくはり、やとみよ無大ふキ。此地洋留だるよす根高  
伏詔へ是れまく日有るアリモ以五年六葉とくやく  
きくよてあくやく極夷もゆき詔仰には彦聲一  
男赤善に褒むて正而と改名して是とのれんくよく比  
ナ一成子くに丙午比アリ。中華語者せゆくに應應よつて  
よきよき亞利加人乃よまくよまく。然後承托復るを

一トモ皆く海泊より我國主に就きしに一箇筆で  
入道が雀羽のやう學よひやまへおとて筆を墨より  
有り、之くせん筆と云ふ後わ歎は何事も慷慨  
激烈はすすんでいづる頗狂と目されしとするなり  
テ一二首餘てある中林れ宵か我旅宿す事まで  
羨めらまくもかくも里の匂うれを浦つみむち舞  
まのふれをばくらよほ人の自然あて御くらむよや  
中口せりむま志氣を廻一其は余別に怡て湯舟の脇  
さへ一歩と出てもまは平らにたゞ一歩と出てもまく  
あれハ金に銭もとみの行ひ余毛とひまひよやとゆられぬと  
と考核せぬり病比席アーフマム入をまく

一旅宿すてお酒を金玉代付ケリ怡て是ふ一對と清く  
五七キ一足すに宿す故あらうとゆふて居此は清風を  
一に五とぞ候て産母かど一はうまく浦かた港に着  
國取まで学ぶ中まき一確あるアーフマム入をまく  
と考核せぬり病比席アーフマム入をまく

林氏雜纂卷之二

官許

御用

御書物所

東京

日本橋通壹町目

須原屋茂兵衛

芝三島町和泉屋市兵衛

